

令和6年度 FHU データサイエンス教育プログラム

科目に関する自己点検・評価

令和7年4月

藤田医科大学 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム委員会

<自己点検・評価について>

自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 《学内からの視点》
(プログラムの履修・修得状況について)

各学部の学務課担当事務員が随時確認している。欠席超過者や成績不良者などが発見された場合には、その内容が各学部の教務委員会で共有され、必要に応じて学生との面談を実施している。年度末には、藤田医科大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム委員会(以下、「本委員会」と呼ぶ)において、各科目コーディネーターに作成を依頼した自己点検票をもとに本プログラムの問題点の洗い出しやその解決策について議論し、必要に応じて科目コーディネーターへフィードバックしている。

【評価結果】A

学生の履修・修得状況の把握について適切に実施されている。

(学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度について)

(本プログラムに限らず)すべての科目において、受講生は講義実施日ごとに授業評価アンケートに回答を求められ、各科目の講師は随時、その評価結果や学生からのコメントを確認できる。また、アンケート結果は教育推進本部会議においても点検・評価され、その結果をもとに改善や向上に向けた提言がなされる。その提言をもとに、本委員会で具体的な施策を考案し、科目担当教員にその実践を依頼する仕組みを構築している。

【評価結果】B

授業評価アンケートの回答から、評価結果やコメント確認を事務局がまとめ、教務委員会や教授会でも点検、評価がされ適切に実施されている。

(学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度について)

本プログラムを構成する科目は事実上の必修科目となっているため、後輩等他の学生へ推奨度の調査は実施しておらず、また、その必要はないものと考えている。一方で、本委員会が主催となって「数理・データサイエンス・AI教育のための全学セミナー」を年1回以上開催し、そのセミナー中に実施しているグループ演習やハンズオンでの議論を通して、学生本人やその学友の本プログラムへの関心を確認している。

【評価結果】B

本プログラムの実施が本年度からで、構成科目が事実上の必修科目であるため、後輩や他学生への推奨は行っていないが、教職員も含めた「数理・データサイエンス・AI教育のための全学セミナー」を開催するなど学生のみならず、教職員も含めて本プログラムの浸透に向けて取り組んでいる。参加者からも好評であったとの声も聴くので、関心は高まっていると捉えている。

(全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況について)

本プログラムを構成する科目は事実上の必修科目となっているため、基本的には履修率は100%達成となる。ただし、今まで各学部において個別に実施していた科目をプログラムとして運用を始めたのは令和6年度からであるため、収容定員と科目単位を取得する学年(時期)の関係で初年度はパーセンテージが低い、令和9年度までには在学生全員が100%履修済となる見込みである(※医学部は6年制のため令和9年度の5・6年生については100%履修済見込みの算出対象外とするが、同科目は本プログラム開設以前から医学部では卒業要件の必修科目となっているため、実質令和6年度の2年生以上の学生は全員履修済である)。一方で、年度末には、本委員会が実施するプログラム自己点検において、各科目コーディネーターから学生の関心や学生のレベルに応じた講義が提供できているかについて自己点検票による聞き取り調査を行っている。

【評価結果】 B

令和6年度から実施したプログラムであるため、履修率が低いのは想定範囲内で、構成のほとんどが必修科目であるため、数年後には全学部で100%になる見込みであることから今後も問題なく、適切に実施計画されていくものと評価する。

(数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させることについて)

本委員会が主催となって「数理・データサイエンス・AI教育のための全学セミナー」を年1回以上開催している。ここでは、学生・教職員と一緒にグループ演習に取り組むプログラムも組み入れており、参加者の自由な発想で課題設定をし、生成AIや統計処理技術など本プログラムが講義科目で提供する知識や技術を用いて問題解決に取り組むことを目標としている。このように、能動的な学びの場を提供することで、数理・データサイエンス・AIを学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる取り組みを行っている。

【評価結果】 B

本委員会が主催として行った取り組みのため完全な自己評価とはなるが、令和6年度から実施し、本セミナーについては東海ブロックのコンソーシアムにも報告、説明会の場でも報告いただけた。今後もデータサイエンス・AIを学ぶ楽しさや意義についての理解を広げたい。

(内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすることについて)

※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載

年度末に本プログラムを構成している科目責任者に、各科目で提供している講義の内容・実施方法・特徴、課題をまとめた自己点検票の作成を依頼している。本委員会では、自己点検票を回覧し、学生の理解や関心を向上させる授業方法や現場での課題を議論し、必要に応

じて科目責任者にフィードバックしている。加えて、上記の「数理・データサイエンス・AI教育のための全学セミナー」は新たなテーマや授業方法を試行するための模擬授業にもなっており、良いものは講義にも組み込むことを推奨する取り組みを行っている。

【評価結果】B

各学部の本委員会を構成する教員の中においても、活用できるコンテンツがあれば共有できるような体制が取れており、必要に応じて各学部の科目責任者に情報提供を行っている。

自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 《学外からの視点》

（教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価について）

各学部学務課において卒業生の進路先は把握しており、調査の必要があれば、IR推進センターや各学部のIR分室に本プログラムの修学が就職先でのどの程度役立ったかという調査は可能な体制にある。さらに、本学付属病院にも多くの卒業生が在籍しており、彼らの活躍状況や病院での評価を容易に調査できる体制にある。

【評価結果】B

プログラム実施1年目のため、調査実績はないがいつでも調査可能な状態が整備されている。また、学部による多くの卒業生が本大学病院にて勤務しており、病院とも連携して調査可能となっている点も評価できる。

（産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見について）

医療系大学であるため、卒業生の多くは医療業務に携わっており、本学付属病院にも多くの卒業生が在籍している。配属先医局から本プログラムに関連する現場の課題が、全学教学運営委員会や教育推進本部会議に上がってくる仕組みが整っており、本プログラムの改善に活用できる体制にある。

【評価結果】B

本学の卒業生の多くは医療従事者となる。本大学病院だけでなく、関連病院にも多くの卒業生が就職している。また、毎年1回産業界との意見交換会を実施しており、他大学、他病院、本学の位置する豊明市役所、地方公共団体等が参画し、学内の各種ポリシーや制度などの見直しについて検討、審議が行われ、教育プログラムについての課題があれば学内審議委員会に報告があがる仕組みが整っており、問題なく実施されている。

<評価レベル>

A：問題なく実施されており、優れた点が認められる。

B：問題なく実施されている。

C：改善の必要がある。